

薬剤アレルギーに対するパッチテストおよびリンパ球刺激試験の有用性の検討
○佐藤 雄己¹, 伊達 美南子¹, 後藤 友香里¹, 佐藤 萌¹, 槇原 洋子¹, 伊東 弘樹¹,
武山 正治¹(¹大分大学医学部附属病院薬剤部)

【背景】薬剤アレルギーの起因薬剤を検索する方法にはパッチテスト (PT) や薬剤リンパ球刺激試験 (DLST) などがある。今回、アレルギー起因薬剤同定試験における両手法の有用性を明らかにするため、薬剤部に調製依頼があった症例を対象にその実施内容について調査・解析した。

【方法】調査期間は2004年1月～2007年1月までの4年間とし、薬剤部に試薬調製依頼があったPT施行症例の実施内容(実施症例数, 薬剤系統, 薬剤名等)について調査した。また薬剤アレルギー症例25例についてPTならびにDLSTの陽性率と起因薬剤について解析した。

【結果】調査期間におけるPTならびにDLST実施症例数は67例であった。PTの調製依頼があった薬剤数は182剤であり、その内訳は医療用医薬品の先発品が145剤と最も多く、次いで後発品が25剤, 一般医薬品が6剤, その他が6剤の順であった。また薬剤系統別にみると解熱鎮痛剤や抗生剤が多かった。次に、解析可能な20症例について試験結果を調査したところ、PT陽性率は24% (6/25), DLST陽性率は50% (5/10)であった。また陽性薬剤として、塩酸クリンダマイシンやロキソプロフェン等が含まれており、それぞれ陽性率と有意な相関が認められた。

【考察】アレルギー起因薬剤同定試験の陽性率は、PT等の皮膚テストでは10%以下であり、DLSTでは20%との報告がある。今回解析した25例のPTおよびDLST陽性率は既報よりも高く、PTおよびDLSTはアレルギー起因薬剤同定に有効であることが示された。以上の結果は今後のアレルギー起因薬剤同定試験の重要な情報となるだけでなく、薬剤管理指導時の薬剤アレルギーの防止と早期発見に多いに役立つと考えられる。